

共同研究

善教寺宝物「布岳の咸宜園図他」

—幕末から明治維新に

活躍した咸宜園生たち—

解説 矢野 徳 弥
鶴野 博文

はじめに

幕末、豊後臼杵領大分郡戸次駅、大谷派妙正寺出身の小栗栖香頂、布岳の秀才兄弟は相次いで咸宜園に入塾、兄香頂（前号「家長公旅順詩巻」で紹介）は宜園の三才子と称せられ、後上京し維新後、国の内外で活躍。

弟布岳は宜園の成績評価で九級（最高級）下に至る。卒後さらに京師に遊学仏教の興義を極め、日田長福寺住職に迎えられていたが明治二年、当時日田県知事松方海東（正義）侯に請われ、一時蓄髮（還俗）して弾正台出仕に補せられ官に入る。以来明治二十一年善教寺住職、その後も国の内外に亘って教育・仏教の興隆に尽くし朝廷はじめ政府、仏教団体からもその功を認められているが、詳細は省略。

資料(1) 広瀬淡窓より妙正寺あての手紙

弟梅舟侯中源さま
候は在清福翁さま
身軀好く、堂々として居
心も多分、心は静か、旅費
は、候は、且、在、品、は、重
く、心、も、多、分、静、か、旅、費
は、候、は、且、在、品、は、重
く、心、も、多、分、静、か、旅、費
は、候、は、且、在、品、は、重
く、心、も、多、分、静、か、旅、費

六月十日
妙正寺
小侍

【口語訳】 () 内は筆者註

貴翰拝読仕り候。溽暑しよくと(梅雨)の候
益々後清福御座成され

敬賀奉り候。小生無事、御希念

有る間敷候。然者、毎々旅宿へ

御光臨在之、且、佳品御恵み

重々感謝奉り候。此の節も、

小生・愚妻・範治・孝之助

名々御見廻之品、照数(数に合わせ)

拝受仕り候。御厚儀之至り

御礼申し上げ尽くし難く候。一同、

私より宜しく謝辞申し上げ呉れ候よう

申し出で候。

一 大戩せん様(兄香頂のこと) 御壮健、学業

日を追って御進歩に相成り候。お頼み

之書、此節は溽(湿気) 餘りの他、

御鴻(便)を期し候。 頓首

六月十六日 広瀬木馬(きうま)求馬)

妙正寺様
以侍者

【背景】

たいへん成績の良い子弟を預かった塾と保護者(妙正寺)とのいい関係が察せられる手紙文で、淡窓も「大戩様」などていいいな言葉つかいである。

この間、咸宜園の人事関係については、例の「官府の難」により、二代目の淡窓の弟旭荘後に養子)は大阪にあり、養子の青邨(範治)及び四代を継ぐ予定の孝之助(林外旭荘の長男)が同居している時である。

この「官府の難」というのは、一八一七年(文化一四)、咸宜園の開塾と同年に、塩谷大四郎郡代が日田に赴任してきたことに起因する。

幕府高級官吏として功名実績を挙げたい彼は、御用商人としての弟久兵衛の才覚と淡窓の卓越した学才を二つながら利用しようと、はじめは優遇策でのぞんだが、咸宜園の方がままにならないので、一八三二年(天保二)咸宜園に介入弾圧を始めた。

三〇年、淡窓は官府の束縛を嫌って末弟の旭荘に塾主を譲っていたが、若い旭荘はさらに対立を深め塾主を辞し一八三六年、大阪へ出奔、長子孝之助が幼かったので、四四年から淡窓は高弟の矢野範治(青邨)を養子(義子)

に迎えて塾務をとらせていた。

妙正寺の大猷（香頂）はこの次の年に入塾、手紙で「：
範治・孝之助」とあるのはこのことである。

さて、ここで塾創立から林外の代まで宜園経営の裏方で第一の重要な役目を果たしているのは淡窓より八才下の次弟久兵衛である。

幼少から神童といわれたほどの淡窓も病弱のため、四つの藩の御用商人の重責は久兵衛に回って長男と入れ替わり、博多屋の宗主を継ぐことになった。

子供の頃から兄を心から尊敬し、学問の指導も受け、家の財政を盛り立て、塾開設の資金を工面、運営に協力、那代と塾の渉外にも心を砕き、旭窓や林外、範治などの広瀬家すべてにわたって面倒をみており、久兵衛なくして咸宜園は有り得ない、とまで極言できるが、ここでは詳述を略す。

資料(2)―① 広瀬青邨

【略伝】

文政十三年下毛郡土田村に生まる。通称範治、世叔とも号す。一八三四年（天保五）、矢野卯三郎の名で入門。

九級（最高級）に至り都講（塾頭）、二十六歳にして淡窓先生の義子となり、その業をたすけ、林外（二代旭窓の子）の長ずるまで、宜園の教育に任ず。

【原文】

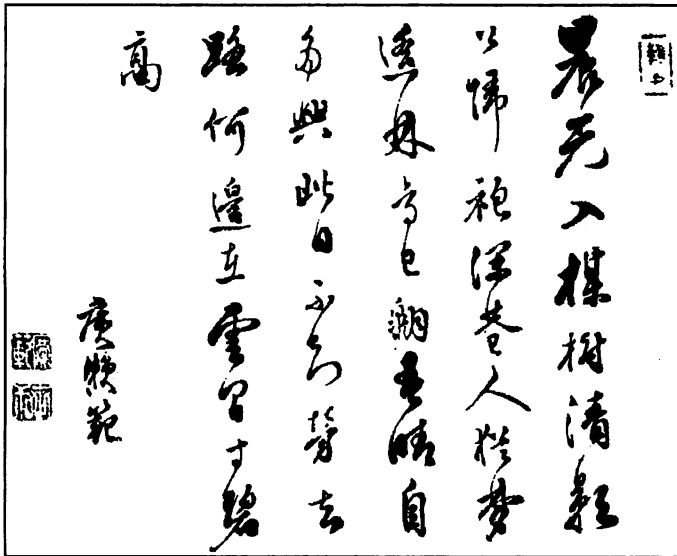
青村廣瀬先生温厚長者也其遇書生深、推誠宜園三子弟子不誑其澤久哉希三先生名一範字世林豊前人初姓矢野後為藩高之義子冒今姓明治、初字辱仕於京都附岩子翁修史為現在京為筆放翁、教師其成績未可測也

【口語訳】

青邨広瀬先生は温厚なる長者なり。其の書生を遇するに諄々誠を推す。宜園三千の弟子其の（恩）澤に浴せざる者幾ど希なり。先生名は範、字は世林、初めの姓矢

野、後淡翁の義子と為り今の姓を冒す。明治の初め京都府岩手県修史局を歴任し、現在東京華族校の教師として其の成績未だ測られざるなり。

漢詩(1) 広瀬範一青邨



【解説】

晨光入楸樹

清影今帰袍

深巷人猶夢

透林鳥已翔

春晴自多興

此日不知勞

去路何邊在

雲間寸碧高

【口語訳】

晨光楸樹(梅の木)に入り

清影今ほや帰袍(わたいれ)に帰す

深巷の人猶夢見るがごとし

林を透かして鳥已に翔ぶ

春晴自ら興多し

此日労を知らず

路を去り何れの辺にあらん

雲間に寸碧高し

【大意】

晨光(朝日の光)が梅林に差し込み、清らかな影が私の衣服にも映っている。巷では、人々はまだ太平の夢をみているようだ。鳥たちは、もう林の間を翔びまわっているというのに。

春の晴れた日は自然と興趣に満ちている。今日は日ごころの労苦を忘れ、本道をはなれて、どの辺りへ行ってみようか。さて、高い雲の間に、青空も少し見えてきたようだ。

【原文】

美濃僧大夢宜園自長其髮稱
岐蘇良^{三嶋}人奇偉才藻純辟
維新、初挺身入薩軍大久保利
通愛共志所至從軍利通夙有
毀佛之志信州之役大夢亦從謂
利通曰、龍光寺阿彌陀如來岸
世称靈^靈、請試之乃跨馬過^門、
高呼曰此佛無靈則殺馬^絶、
馬揮鞭長驅方至門前馬驚
蹉跌大夢勦落折其右腕傷
甚^甚、遂^遂以此瘁死利通^怪、
排^排仲之舉^志、大夢病中深自悔
責至死之日、杯親戚朋友懺悔
訣別、口不絶称念端坐而逝^之

【解説】

美濃僧大夢去宜園自長髮稱／岐蘇良。三嶋人、奇偉才藻
絶群。／維新之初挺身入薩軍。大久保利／通受其志所至
從軍。利通夙有／毀仏之志、信州之役大夢亦從謂。／利
通曰、善光寺阿彌陀如來像／世称靈、不許騎馬入門、汝
試之。乃跨將入其門／高呼曰、此仏有靈則、我馬必無有
安。／馬揮鞭長驅方至門前、馬驚／蹉跌、大夢翻落折其
右腕傷／甚矣。遂以此瘁死。利通怪之承挫／排仏之志云。
大夢病中深自悔／責、至死之日招親戚朋友懺悔／訣別、
口不絶称念端坐而逝矣。

【口語訳】

美濃僧大夢宜園を去り髪を長せしめしより岐蘇良と称
す。三嶋の人、奇偉なる才藻（文才）群を絶す。

維新の初め身を挺して薩軍に入る。大久保利通その志
を受け至る所從軍せしむ。

利通夙に毀仏の志あり信州の役に大夢亦從う。利通謂
て曰く、善光寺阿彌陀如來、世を挙げて靈を称られ、
騎馬して門に入るを許さず。汝、之を試みよ、と。乃
ち跨馬將に其の門に入らんとするに高く呼ばわりて曰く、
此の仏靈有らば則ち我が馬必ず安ずる有る無し、と。馬

に鞭を揮って長駆し、方に門前に至らんとするや馬驚きて蹉跌し、大夢翻落その右腕傷つくこと甚だし。遂にこの瘡を以て死す。利通之を怪しみ承（懲）りて排仏の志挫かると云う。

大夢病中深く自らを悔責、死の日に親戚朋友を招き懺悔訣別し、口に絶えず念（仏）を称え端座して逝きたり。

漢詩(2) 僧大夢 (五言律詩)

東山時素早 氷雪化煙霞
吟履頻過野 春人粧在家
倦空思竹葉 快忽遇梅桜
到処靡蕪偏 青袍映嫩芽

濃中 蘇良

【解説文】

東山時気早
氷雪化煙霞
吟履頻過野
春人粧在家
倦空思竹葉
快忽遇梅桜
到処靡蕪偏
青袍映嫩芽

濃中 蘇良
(落款)

【口語訳】

東山時に気早く、氷雪煙霞を化す。
吟行の履（履きもの）頻りに野を過ぎる。
春、人粧いて家に在り。空思竹葉（酒）に倦む。

快きは忽ち梅桜に遇うことなり。
到る処靡蕪（川芹）偏く、青袍に嫩芽映す。

【大意】

早春、東山の氷雪は早くも春霞をなして良い風情である。吟行の人々は野原で頻りに歩きまわっているようだ。春はみんな身綺麗にして家に居り、酒を飲みながら色々な空しい思想に耽っているが、やがてどちらにも飽きてくる。

しかし、一歩外に出てみると快いことは忽ち梅の花、桜の蕾にあうことである。到るところ川芹が青々としていて、私の青袍（無位の者の服）にも嫩芽が映える。

【背景】

幕末から明治維新にかけて咸宜園門下生はずばらしい活躍をしているが、僧大夢も幕末の過激な政治活動に参加してこの事故で死んでいる。時勢の風にのり、長髪（還俗）して薩摩軍に投じ、善光寺の靈験を試すという激

しきである。

ところが、さらに激しいのに長三州等がいて長州の奇兵隊に入ったりして負傷までしている。当時、彼らは勤王の志士として働き、後に明治新政府のためにも活躍した者も多い。

これらの志士活動の思想的な原動力のひとつをなしているのは広瀬旭荘だ。「官府の難」を避け、大阪に開塾、淡窓を越えると言われた才氣煥発の上に「活史・活学」（現代史と現実に学べ）を標榜、講義したので、志士たちが交わりを求めて蟬集し、旭荘を慕って上阪、常に旭荘に側近していた咸宜園最優秀クラスの長三州も同調、「先生には塾生教育の任があり、行動は私がやります。」といった、という。ペリー来航の翌年頃からのことである。

時に旭荘四十歳、長は二十四歳。

後に旭荘はかれを木戸孝允に紹介している。

資料(3) 劉石舟略伝

【原文】

(念)

劉石舟名若字君風豊後秋津人也
初名怡全原氏以其先係于劉漢之遺族
遂改姓劉在咸宜園与中子玉未華夜
祖在青市恒賴世志能操
名共不著保茅村在詩集前後篇解
肝臟勝精微巧妙遠近傳之後入京以
以儒為業治於
林市中微諱徑高腹方就賜時人崇之
其子大富通孫三郎號冷自亦為宜園
都講藻思超之才名噴世曾為大宰
府儒官後入京師承父之業終昨日盛
年未知命而没或曰三郎廢里素爽
雄偉天若做数年至維新之際必大
有為天下諾滿志傑楷在哉

市在小学記

【解読】

劉石舟名翥字君鳳豊後玖珠人也

初本姓合原氏以其先係于劉漢之遺族

遂改姓劉在咸宜園与中島子玉米華広瀬

旭莊吉甫恆遠頼母遠帆樓号醒窓秋月劉伯起橋門齊

名其所著綠芋村莊詩集前後篇錦

肝繡腸精緻巧妙遠近伝之後入京師以儒為業今於

禁中徵講經書頗有寵賜時人栄之

其子大畜通称三郎号冷窓亦為宜園

都講藻思超父才名噂甚曾為太宰

府儒官後入京師承父之業縫帷日盛

年未知命而没或曰三郎胆略豪爽

雄偉天若假數年至維新之際必大

有為天下諸藩豪傑惜嘆哉

布岳 小憲記(落款)

【口語訳】

劉石舟、名は翥、字は君鳳、豊後玖珠の人なり。初め

の本姓は合原氏、其の先(祖)劉漢の遺族に係わるを以

て、遂に姓を劉と改む。咸宜園に在りては中島子玉米

華・広瀬旭莊吉甫・恒遠頼母遠帆樓、号醒窓・秋月劉

伯起橋門らと名を齊しくす。

其の著す所の「綠芋村莊詩集前後編」錦肝繡腸にして

精緻巧妙、遠近これを伝う。後京師に入り儒を以て業

と為す。禁中に徵され經書を講ず。頗る寵賜有り。時

の人これを栄(誉)とす。

其の子大畜、通称三郎、号は冷窓もまた宜園の都講

(塾頭)たり。藻思(文才)父を超え才名の噂甚だし。曾

て太宰府の儒官たり。後京師に入り父の業を承け帷を繕

わんとする日、盛年未だ命を知らずして没す。

曰く、三郎胆略豪爽にして雄偉なり。天もし数年を

假さば、維新の際に至り、天下に大いに為すこと有らんと

と。諸藩の豪傑惜しみて嘆く哉。

【語註】

・錦肝繡腸 詩文に優れた人の内臓は、錦や金銀糸の

さらびやかな刺繍でできているかのよう

に、美しい表現がすらすらと口に出ると

いう例え。

・胆略 大胆で知略に秀でていること。

・帷を下ろす 塾を開く、からの連想訳。

漢詩(3) 劉石舟

【原文】

晋用犧羊頼楚材
貪情久向我邦催
只甚英狄為戎首
豈謂蘭奴是罪魁
奔電一天雄砲發
寸陰千里巨船來
偏思鎖國非今務
大略伍欽偉武才
蘭人某著鎖國論
我邦拒外
交
長崎作 石舟生

【口語訳】

晋犧羊を用いて楚材に頼る。貪情久しく我邦に向かつて催さる。只甚だしきは英狄戎首となる。豈蘭奴これ罪魁と謂わんや。一天に電奔りて雄砲発す。寸陰(短時間)千里巨船来る。偏に思う鎖國今務むるに非ず、と。

【解説】

晋用犧羊頼楚材
貪情久向我邦催
只甚英狄為戎首
豈謂蘭奴是罪魁
奔電一天雄砲發
寸陰千里巨船來
偏思鎖國非今務
大略伍欽偉武才
蘭人某著鎖國論
我邦拒外
交
長崎作 石舟生

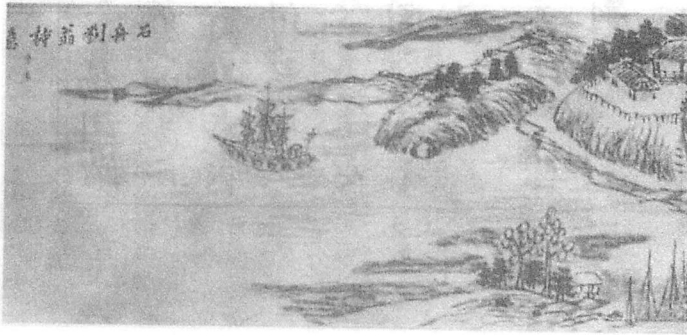
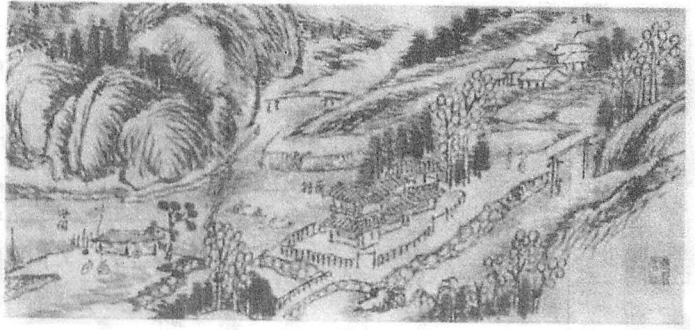
【大意】

春秋時代の二大国。晋は南へ、楚は北方へ勢力拡張を図る。この二国間の小国は生贖の羊の如く晋楚戦に利用された。
イギリスやオランダなどが久しく日本(犧羊)を食らんとしている。

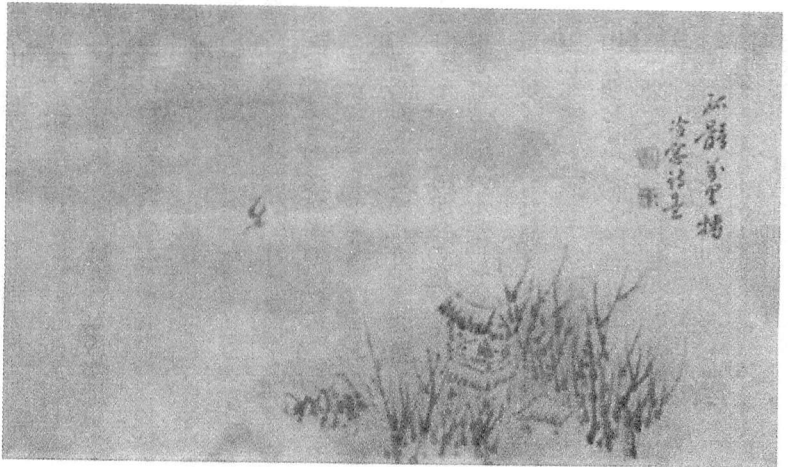
近頃はイギリスが頭となりオランダは頭とは言えない。一瞬の稲妻とともに大砲が発射される巨大な軍艦は時に千里日本に到達する。ただ思うに今の努めは鎖国だけではなく、大きな戦略を組み、大軍事力による解決は欽むべきだ。

蘭人某：一のところは、ペリー以前にオランダ皇帝から、当時の中国の事情から日本は開国すべきだという勸告書が来たが、幕府はそれを無視したこと。

長崎にて作す 石舟生



画幅「石舟劉翁詩意」
石舟の詩を布岳が写した
(上下↓右左)



「孤鶻萬里搏 冷窓 (劉大畜) 詩意」 布岳写

漢詩(4) 劉大畜(石舟の長男 三郎)

【原文】

慨余不由漏 兀在骨腸間 灌之以狂藥
 沸騰如驚瀾 荏苒歲華改 崎嶇世路難
 酬矢已傳 吐肺行社 秋風吹曠野
 落日照寒山 暮色雲際來 蒼然滿荒閣
 一嘯倚高閣 孤鶻萬里搏
 醉後走筆寄某生

劉大畜



【解説】

慨氣無由漏 兀在骨腸間 灌之以狂藥
 沸騰如驚瀾 荏苒歲華改 崎嶇世路難

【口語訳】

慨氣漏る由無くば、
 元骨腸の間に在り。
 之に灌ぐに狂藥を以てすれば、
 沸騰すること驚瀾(驚くような大波)の如し。
 荏苒(のびのびに) 歳華(年月) 改まり、
 崎嶇(けわしい)たり世路の難。
 詩を裁ちて知己に酬いんとして、
 縷々肺肝を吐く。
 秋風曠野に吹き、
 落日寒山を照らす。
 暮色雲際に来たり、
 蒼然として荒閣に満つ。
 高閣に倚りて一嘯す。
 孤鶻(はやぶさ) 萬里を搏く。

【大意】

国を憂い政ごとの不正を憤る慨気は元々この五体の中心部に充滿しているが、一たび勤王の志のような狂薬が注がれると驚瀾のように沸騰、噴出してくるものだ。

今やだからだと歲月のみ流れて、直面する国難解決は困難を極め、人々の生活は苦しい。

そこで、(志士の)活動している知己某に酬いたため詩を作り私の心底をくわしく述べる。

(現状は)秋風が曠野に吹き、落日が枯れ山を照らし、夕闇が暗く空にも荒れた国境にも迫っているように見通しは良くないが、高閣で一たび声高く(愛国の)詩を吟じたなら、たった一羽の鷗はやぶさとしてでも万里まで飛んでいく覚悟である。

【背景】

咸宜園開塾(一八一七年)がすでに幕末から明治維新にかけてのタイミングにぴったり照準が合っており、官学には有り得ない入学制限無しで、当時の日本の殆ど全国から学生が集まり、加えて現在の学校に近いまたそれ以上の教育方法を活用している。

広い地域からの自由な考えの優秀な若者たち、日本の外庄による動乱の始まりなどから、現在の学生運動を彷彿させるものがおこつても不思議ではない。

さらに天才的儒学者、二代塾長の広瀬旭荘が旗振りの先頭に立っているのである。

劉石舟(旭荘門下生)、その子大畜の詩は当時としてはかなり過激で、すでに時局を詠み込んでいるのが普通の漢詩と大いに異なる。

さて、僧大夢、また長三州とも協力して働いたと言われている、佐伯藩の青木猛彦などは不運にも維新を待たずして死んだが、もし生き残っていたら新政府で相当な地位と活躍が期待できたにちがいない。

咸宜園門下生は全国区で、しかも四千人ともいう多数の卒業生を出しており、殆どが勤王派なので、当時優秀な新政府官吏が不足していた日本にとって、その基礎作りにとれほど功績を挙げたか計り知れないものがある。

善教寺資料の「竹林庵布岳遺響」の中には、尊皇愛国の詩文が随所に掲載されていることから以上のことが伺える。

資料(4) 咸宜園圖

明治十六年(癸未)一月

布岳(小栗憲一写)

①懷舊樓(落款)

◎東西南

三塾

凡可客

生徒

百餘員

都講一員

總督

塾政合有

規約八

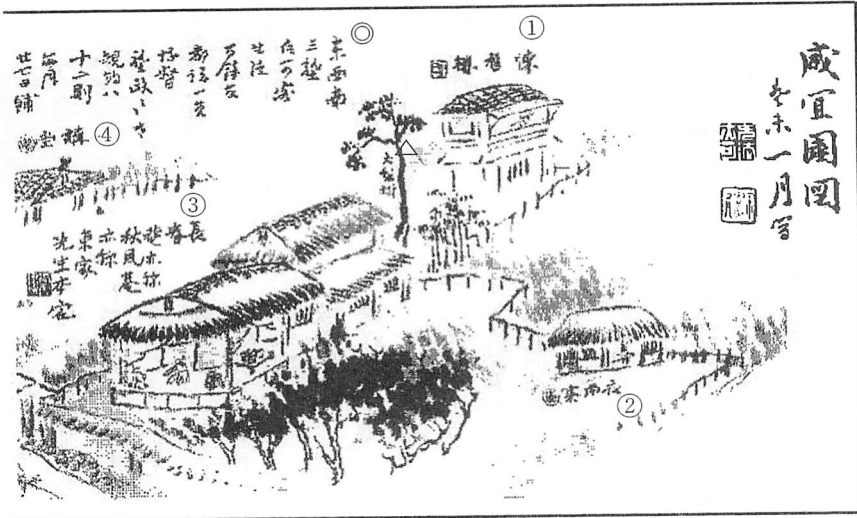
十二則

每月

廿七日舖

△大梨樹

④講堂



②夜雨寮

(落款)

③長

春

庵亦称

秋風庵

亦称

東家

先生本宅

(落款)

日都講

朗読規約

于講堂

舎長副監

試葉監

洒掃監

會計監司藥

幹事侍史夜番

各有定員

北塾貧生之

所別有舎長

文玄先生

墓碑

柴秋村

之所

書

(落款)

⑤東塾

東樓

(落款)

⑧北塾

(落款)

⑩長生園

(落款)

碑文先生之所自製而

旭莊之可書也 (落款)



末世トハ誰

云ソメシ初樓

豆隈大道

⑥遠思樓又稱

西家青村先

生寓此

(落款)

⑦西塾 (落款)

⑨南塾

南樓

(落款)